

## 関信三（1879）『幼稚園法二十遊嬉』 Shinzo SEKI(1879) “Kindergarten Method Twenty Gift”

渡辺 直人（和歌山信愛女子短期大学 保育科）

本稿は関信三（1879）の『幼稚園法二十遊嬉』のブックレポートである。本稿では、本書の構成や特徴、本書から読み取れる社会背景、本書の広がりや効果に関して述べている。様々な幼児教育の課題がある現代において、原点への回帰が求められていることから、幼稚園教育の「立脚点」ともいえる本書を紹介した。

キーワード：恩物 フレーベル 関信三

### 『幼稚園法二十遊嬉』の紹介

『幼稚園法二十遊嬉』（以下、本書）はわが国で初めてフレーベルの教育遊具「恩物」が紹介された書物である。1879年発行と明治初期の文献であるが、140年以上たった今でも、大いに参考になる書の一つである。

本書の発行に至る背景、すなわち関信三の動向は具体的にはわかっていない。関信三は数奇な人生を送っており、時代に翻弄された生涯であった。日本保育学会の初代会長である倉橋惣三とともに、日本幼稚園の父とも言われることもあるが、彼は東京女子師範学校附属幼稚園の監事に就任する晩年まで、幼児教育とは全くといってよいほど無縁の人物であった。

彼は現在の愛知県で生を受ける。家は寺であり、当然ながら彼も仏教徒である。一説には破邪護法者であるともいわれている。

若き日には、禁教令がしかれていた当時、横浜等でキリスト教徒の動向を探るべく諜報活動を行っていた。また、キリスト教の調査のためイギリスに留学の経験もしている。様々な経験をした結果、キリスト教に明るいだけでなく、生の海外の情報を知ることでもできた。明治維新後、開国したばかりの当時に、生の海外の情報を知る人物は少なく、さらに英語話者の関は貴重な人材であった。その後も日本政府の命に従い、留学後は英語教師として勤務し、その後東京女子師範学校附属幼稚園監事（園長）に就任する。

しかしながらその当時には既に病におかされており、数年後に没している。そして、没前に発行された書が『幼稚園法二十遊嬉』である。

本書は、わが国で初めて恩物が体系的に紹介された文献であるが、それほど重厚な書ではない。当時の人であれば数時間で読めるであろう。ただ、現代人は読解に数日かかるのではないだろうか。本書は明治初期発行という時代的背景もあり、現代とは書き方が異なる。序章は楷書ではあるが、恩物紹介のページは全て変体仮名で書字されている。また、言文一致以前ということもあり、今のような文体でもない。

では、本題に入るが本書はどのような構成であるかというと、序章と本章の2部構成となっている。序章では、幼児教育の重要性等が12ページにわたり記されている。次に本章では、恩物20種類の紹介・説明が記されている。恩物説明のページでは、一つの恩物につき片面1枚を使用しており、計20ページにわたり記されている。

ただし、恩物の説明は具体的とはいえない。「この教具はどのようなもので、ある形の木片が幾つある」等のパッケージ面の説明が主である。ただしイラスト付きで紹介されており、どのような状態で取り組むかが一目でわかるころは、当時の幼稚園保母にとって大いに参考になったであろう。文部科学省が紹介している、東京女子師範学校附属幼稚園時間割にもある通り、当時の幼稚園教育は恩物の操作が主の教育内容であった。無論、本書はその手引きとして機能していたであろう。ただし、あまり詳細なことは示

されていないため、不明点は、当時に東京女子師範学校附属幼稚園主任保母であった松野クララにたずねるか、もしくは彼女から教えを受けた者にたずねるか、幼稚園創始期にはそれしか手段がなかったであろうことも予想できる。

ただし、現在の恩物とは異なる。現在では1から10種類目を「恩物」(Gift)、11から20種類目を「作業具」「手技」「手技工作」(Occupation)と呼んでいるが、本書では1から20種まで恩物という呼称で統一されており、作業具の概念自体示されていない。内容物も一部異なるものもある。

なお、現在でも恩物・作業具あわせて20種類といわれることが多いが、当初はフレーベル研究者によって恩物の数は異なっていた。もともとフレーベルが10種類を恩物、種類を作業具と示したわけではなく、フレーベル亡きあと、後世の研究者によって編纂されたものだからである。

この恩物は、フレーベルの教育思想を体現化させた教具といわれることもある。フレーベルの教育思想は極めて複雑で、且つ哲学的であり、その根底にはキリスト教的価値観があるという。

ここで、幼児教育の創始期を概観してみたい。今でこそ、幼稚園は一般名詞であるが、当時は「フレーベル私設の幼児教育施設」である。誰もその様相がわからない中で、幼稚園を導入するという事は、フレーベルの思想、教育方法、教育遊具、全て導入しなければならなかった。そこで助けとなったのが、海外の事情に詳しい松野クララや関信三である。

ただし、わが国ではフレーベルの母国であるドイツではなく、アメリカ経由で幼稚園の情報を輸入していた。しかし、アメリカで情報が曲解されてしまったため、フレーベルの思想は伝わらず、多くの内容が誤って伝えられることとなった。これは『幼稚園法二十遊嬉』にもみられるところである。

「正しい情報が入らなかった」、「難解な教育哲学」、「根底の文化的価値観の相違」という点、それに加えて日本の教育事情も重なり、幼稚園は多くの批判を受けることにもつながった。

当時の日本において、幼稚園は貴族階級の子息が対象であった。特に本書の恩物紹介のイラストを見ると綺麗な衣服を召し、絢爛な椅子に腰掛けている子どもが画かれている。まさしく上流階級を対象とした教育であることがみて

とれる図である。且つ、当時の価値観として、幼児の保育の重要性が認められていなかったこと、現在のように子どもを楽しく遊ばせ、遊び等の経験を通じて多面的に涵養するというものではなく、知識の教授を重視していたこともあり、フレーベルや関が示した教育の方向性とは真逆をいった教育の実際であったこともわかっている。教育は貴族階級の人間にとっては一つの手段でしかなかったこともいわれており、これはフレーベルの理念とは相反する様相であったという。

特に上流階級にしか保育サービスが行き届いていない現状に対して心苦しく感じていた保育者もおり、例えば二葉幼稚園の設立者である野口幽香があげられる。このような現状に胸を痛み、慈愛の精神をもって行動に移した保育者も少なからずいたこともまた知られているところである。

少々話が飛躍したが、本書を中心に考察をすると、そのような当時の社会情勢までも垣間見られる。本書は、まさしく日本幼児教育史の根源にあたる箇所位置づけられている文献であると思う。

ここで、関信三に話を戻したいところであるが、実際のところ、彼に関する研究・資料は極めて少ない。資料がほとんど残っていないため、彼の動向を探ることは難しいが、限られた文献をたよりに本書の執筆背景を探ってみた。それでも結論は出せずじまいであったが、三つの有力な説が存在していることが明らかになった。いずれの説も19世紀後半の英語書に手掛かりがあるとされ、今後はその時代における文献精査の必要性が見出された。

最後に、この『幼稚園法二十遊嬉』において、関は踏み込んで考察していないことは上述した。ただし、だからといって価値の低い文献ではない。当時は本書を手掛かりとして、日本の津々浦々にまで恩物が広がっていったこともまた事実である。本書は特にわが国の幼児教育を探るうえで意義のある文献であり、立脚点であるといえる。

現代では、保育・教育に関して多くの課題が浮き彫りとなっている。保育・教育に携わる者にとっては苦難の時期にあると考える。そのような現代において、初心に立ち返ることもまた必要であると感じた。その初心、すなわち原点となる人物こそ関信三である。先人が築き上げてきた偉大な業を、我々が未来へつないでいくためにも、このたび古書ではあるが紹介するに至った。